

2018年 第17回 国際サガ学会参加記

松本 涼

2018年8月13日から17日にかけて、第17回国際サガ学会に参加した。3年に一度各地で開催される本学会であるが、今回はサガの故郷アイスランドで、首都レイキャヴィークのアイスランド大学と、スノッリ・ストゥルルソンゆかりの地レイクホルトとを会場としての開催となった。日本からは本会会員でもある伊藤盡氏、小澤実氏、松本の3人が口頭報告を行った。筆者は初参加であり、とても充実した5日間を過ごすことができた。以下では今後の参考となるよう、その行程を簡単に振り返りたい。

1日目 開会

第17回国際サガ学会は8/13（月）、大学映画館（Háskólabíó）での開会式で幕を開けた。開会式では、運営委員長や文部科学大臣だけでなく、大統領のスピーチもあったことに驚いた。現職のGuðni Jóhannesson大統領は歴史学者でもあるため、大統領になっていなかったら発表者として参加していたかもしれないというユーモアあふれる話で会場を沸かせていた。

はじめに、学会の全体像を確認したい。今回は24カ国以上から約400名の参加者が集った。各日には朝に基調講演があり、その後、1. Saga Origin and Media、2. Artistry、3. Ideas and Worldview、4. 'Með lögum skal land byggja'の4つのテーマに沿った計7つのセッションが同時進行で進められた。とくに4「法の上に国は建つ」は、1117-18年の冬にアイスランドで初めて法が書き留められてから、2018年が900周年に当たることを記念して設定されたテーマである。筆者も主に専門に近いこのセッションを行き来した。ほかに、2018年にアイスランド古典叢書（Íslenzk fornrit）シリーズの新訂版が完成した「ヨームスヴィーキングのサガ」に関する発表が多かった印象がある。

セッション終了後には、レセプションやディナーなど交流のためのイベントも充実していた。1日目のレセプションではレイキャヴィーク在住の各国大使が分担して参加者をもてなし、筆者はスウェーデン大使公邸に招かれ貴重な時間を過ごすことができた。また学会の公式イベントではないが、4日目の夜には在アイスランド日本大使館の方々が、ご厚意で学会とマンガ・シンポジウム（後述）の

参加者を招いたレセプションも開いてくださった。大使公邸の親しみやすい雰囲気の中で日本食を楽しみつつ、北川大使のサガに対する感想などもうかがうことができた。これも小さな国アイスランドならではの醍醐味である。

2日目 レイクホルトとシングヴェトリル

2日目は全日レイクホルトが会場となった（図1、2）。あいにくの雨と寒さだったが、大学とはまた違った雰囲気の中で活発な議論が交わされた。



図1 レイクホルト



図2 図書室でのセッション



図3 シングヴェトリル

レイクホルトからの帰途には、全島集会アルシングの跡地シングヴェトリルへの小旅行も企画されていた。小雨の降る中、「法の岩」があったのではないかとされている辺りで俳優が「エギルのサガ」の一場面（56章、ノルウェーのグラシグ集会）を演じるという余興もあった。参加者は、ふだんは立ち入り禁止となっている丘の斜面に座ることを許され、集会での議論を見守るサガの登場人物たちの気分を味わうことができた（図3）。

3日目 再びアイスランド大学

3日目は自身の報告があり、あまり他のことを覚えていない。筆者が参加したセッションのメンバーはノルウェー中世史の大家Sverre Bagge氏と、13世紀ノルウェー王支配圏の研究で著名なRandi Bjørshol Wærdahl氏、司会はMargaret Cormack氏であった。学生時代から、何度も著書や論文を読み返し

た先達に囲まれての報告は緊張したが、とても光栄だった。報告に対しても、史料や先行研究を熟知している研究者から鋭い質問やコメントが寄せられ、他所では得がたい経験を積むことができた。

4日目 マンガ・シンポジウム

4日目はエクスカーションのための中日で学会は休みだったが、別枠の企画として日本のマンガにおける北欧神話受容を論じるシンポジウム “**Magnað Manga - Conference on Manga studies**” が開催された。これは伊藤盡氏を中心とする共同科研と小澤実氏、アイスランド大学のJón Karl Helgason教授の協働の下に実現したものである。老若男女さまざまな聴衆を得て日本のマンガの現況を伝えることができた。この企画には小澤氏の尽力によりマンガ『ヴィンランド・サガ』の作者・幸村誠氏もお招きすることができ、幸村氏には8/16夜のトークイベント、8/17のカルチャー・ナイトのワークショップにも参加していただいた。どのイベントも盛況で、アイスランドのマンガ・ファンのみなさまに貴重な交流の時間を提供できたと思う。

5日目 閉会

最終日には、まず午前小澤氏が日本におけるアイスランド中世文学の翻訳活動について報告し、アイスランド学会の歩みも紹介された。日本語とアイスランド語の距離を反映してか、詩はどのように訳すのか、マニュスクリプトの差異をどう扱うかなど、翻訳に関する質問が寄せられた。



図4 Jón Karl 氏の報告

報告もあり、近年、日本だけでなく欧米でもサブカルチャーと専門研究との架橋に対する関心が高まっていることを実感した。

午後には伊藤氏が、日本のサブカルチャーにおける北欧神話受容を豊富な具体例を用いて報告し、好反応を得ていた。同じセッションにはJón Karl氏によるアメコミの北欧神話表象にかんする報告（図4）や、ロールプレイングゲームの元祖 Dungeons & Dragonsと北欧文学との関係を論じる

また、この日もう一つ印象に残ったのが女性ヴァイキングに関する報告である。このテーマについては、2017年に発表された考古学論文が大きな反響を呼んだことが記憶に新しい¹。聴衆も100人ほど入りそうな部屋が埋まるほどの盛況で、関心の高さがうかがえた。報告者のLeszek Gardela氏は、これまでさまざまな武具とともに女性が埋葬されている墓30基を調査したという。ヴァイキング時代に女性戦士が実在したかという議論については、状況はケースごとに異なると慎重な態度を保ちながらも、槍や弓矢など、剣や斧よりは遠くからの攻撃が可能な武具の副葬が比較的多いことが、女性の特性を表しているのではないかとの仮説も示していた。Gardela氏は調査の進捗をFacebookページでも報告している²。センセーショナルな話題だからこそ、情報発信は積極的にしつつも結論に飛びつかず、着実に根拠を積み上げていく大切さを感じる報告だった。

その晩、5日間にわたる学会は、ホテル・サガでのカンファレンス・ディナーと深夜まで続くダンス・パーティによって締めくくられた。

全体をとおして

やはり、同じテキストや研究を読み込んでいる研究者と議論ができる場は知的刺激が大きい。今回は筆者自身が留学していたアイスランド大学での開催ということもあり、留学時代の先生や同級生たちの発表を聞き、自分も同じ土俵で議論し続けたい、そのために精進せねばと意を新たに作る機会ともなった。同時に、このような国際学会に、欧米に留まらず日本をはじめ世界各地からの参加者が集うことは、サガ研究の広がりや多様性を示す上でアイスランドや欧米の研究者にとっても意味があるのだろうと感じた。次回は2021年、フィンランドのヘルシンキとエストニアのタリンとの共催である。国際サガ学会は、サガや中世北欧の研究に携わる者にとっては国内ではなかなか出会えない同好の志と語り合える楽しい場でもある。今後、日本からもさらに多くの参加者があることを願う。

¹ Charlotte Hedenstierna-Jonson et al., “A Female Viking Warrior Confirmed by Genomics”, *American Journal of Physical Anthropology*, 2017. この論文を取り上げたJudith Jesch氏によるブログ記事も話題となった。“Let’s Debate Female Viking Warriors Yet Again” (2017.9.9 更新); “Some Further Discussion of the Article on Bj 581” (2017.9.18 更新), <http://norseandviking.blogspot.com/> (2019年5月24日閲覧)

² “Amazons of the North - Armed Females in the Viking Age”, <https://www.facebook.com/Amazons-of-the-North-Armed-Females-in-the-Viking-Age-126517371437469/> (2019年5月24日閲覧)